

いつも一緒 富山のペットたち

ある日突然、おうちのワンちゃんが下半身不随になる。そんな怖い病気があるのをご存知でしょうか。



沖田 将人

アレス動物医療センター院長
(高岡市下伏間江)

犬の椎間板ヘルニア

過剰な運動避ける

重要なことは、いかに予防し、発症したときにいかに対応するかです。

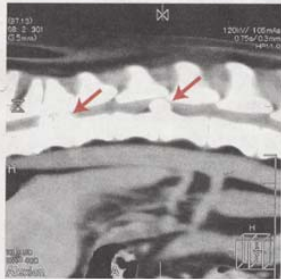
椎間板ヘルニアになりやすい要因としては、「3歳以上」

それは椎間板ヘルニアです。人間では、ぎっくり腰の原因の一つに挙げられるのですが、犬の場合は単なる痛みでは済みません。ひどいときは下半身不随になって全く歩けなくなり、最悪の場合、尿もできなくなって生きていくことが困難になってしまいます。

この病気は関節疾患の出やすい犬種でよく見られ、最も多いのがダックスフントです。その他、シーズー、コーギー、トイプードル、パピヨン、チワワなど、日本で人気の高い犬種にも現れます。近年、発症率は非常に高く、当院では昨年約200匹の犬が椎間板ヘルニアで来院しました。



手術を受け、元気に歩けるようになったダックスフント



椎間板ヘルニアになった犬のCTの写真。矢印の部分が椎間板の突出部

症状出たらすぐ病院へ

「過剰な運動」が挙げられます。年齢の問題は仕方ないとしても、食事と運動の管理は飼い主の方の努力で対応できます。

栄養バランスの問題とは、太り過ぎ、痩せ過ぎ、おやつをた

り過ぎ、階段やソファの上り下りを繰り返したりする行動のことで、犬を運動させる部屋にはカーペットを敷きましょう。階段をやり過ぎず、主治医の先生の

指導を受けてベスト体重を目指すようにしましょう。

過剰な運動は、フローリングや畳などの滑る床で走り回ったり、階段やソファの上り下りを繰り返したりする行動のことで、犬を運動させる部屋にはカーペットを敷きましょう。階段をやり過ぎず、主治医の先生の

設置し、ソファに上り下りしないようにしつけをすることが大切です。

それでも椎間板ヘルニアになったとき、最も重要なのは、できるだけ早く動物病院に連れて行き、治療を始めることです。治療開始が早ければ、手術ではなく、薬などの内科療法で治

が良いとされています。それは、時間がたつとともに、手術による治療効果が低くなるといわれています。

現在は、犬も人間のよう

早期発見が重要

治療法は症状の重症度によりさまざまですが、早期発見、早期治療が重要なことに変わりはなく、飼い主の方がいかに早く気づいてあげられるかにかかって

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第1木曜日に掲載します。

2013(平成25)年5月2日
北日本新聞